



## 1. 北のまほろば 「津軽」

1999年 9月

- 1.1. 津軽富士 「岩木山」
- 1.2. 縄文の道 「木造-車力-十三
- 1.3. 山内丸山縄文遺跡で



【縄文の道 十三湊-車力村-木造】  
岩木山から 七里長浜 十三湖 北海道を望む



【冬の十三湖】  
「北のまほろば」表紙カバー

民族博物館の江口先生から、青森三内丸山遺跡で「月見の宴」があるとのお誘いを受け、9月23日夜～26日 念願の津軽 三内丸山遺跡・岩木山を訪ねました。

また 津軽半島の西側海岸沿いの「縄文の道 木造町-車力町-十三湊」を一人歩いて来ました。30年振りの津軽半島 『縄文の道』でした。

津軽では太宰治の小説に象徴される津軽の暗さは吹っ飛び、新しい流れが根付いています。「地方の時代」「新人類・若者の時代」と言われて久しく、閉塞した都会では感じられない胎動を津軽へ来て、もろに感じました。

来年も是非 三内丸山縄文遺跡の会に行きたいと思っています。

1999. 9. 26. by M. Nakanishi



津軽富士 岩木山



三内丸山縄文遺跡 1999. 9. 26.

## 1.1. 津軽富士 『岩木山』



iwki.htm 1999. 9. 24.



【岩木山スカイライン】



【岩木山から 津軽半島を望む】

昨日の雨がうそのような快晴。台風と競争の今回の津軽。

9月24日早朝東京からの夜行バスで弘前着。すぐに岩木山の登山口嶽温泉行のバスに乗換え、嶽温泉に向かう。

今回の津軽 walk の目的 三内丸山縄文遺跡訪問の前に、是非とも津軽の象徴 岩木山に登り、司馬遼太郎の言う『北のまほろば』津軽平野を一望したい。

明日行く、津軽半島西海岸沿いの『縄文の道 十三湖一車カ一亀が岡一木造』をきっちり眼中に収める予定。岩木山は津軽半島の独立峰で、いつも頂上に一筋の雲を巻いているが、今日は展望が効きそうである。



## ● 津軽富士「岩木山」の登山口 嶽温泉よりスカイラインを通過して頂上へ

嶽温泉から岩木山スカイラインで八合目へ。八合目から頂上へ向かって山の南面を登る。距離は短い、直登に近い登りがつづき結構きつい。

山を眺めつつどんどん高度を稼ぎ、展望が効く明るい山道で楽しい。

岩木山の西斜面越しに日本海に突き出た津軽半島の海岸線がくっきり見え、そのむこうには北海道の山も浮かんでいる。

後ろを振り返ると八甲田の連山・世界遺産に登録された白神山地の山々が見える。白神山地は特に緑が濃く、ブナの原生林がどこまでも続いている。すぐそこに見える。一度は是非、行って見たい。



津軽半島眺望



白神山地眺望

岩木山の尾根に出て、急なガレ場の急登をロープの目印を頼りに登ること約1時間登り始めて約3時間足らずでゴツゴツした岩が組み合わさった狭い頂上についた。

天候は晴れているものの雲が巻き、一瞬眺望が効いたと思うとすぐガス。めまぐるしく天候が変化している。



頂上へのガレバ

## ● 頂上 で

大きな岩の上に座って 展望の利くのを待つ。

ほんの一分少々であるが、ガスが切れると眼下に弘前市を中心とした津軽平野が広がる。

その向こうに日本海に突き出た津軽半島が直線的な海岸線をみせ、中央には陸奥湾から恐山が見える。

ぐっと北から右へ身を回すと八甲田の山々から十和田・八幡平の山々が見え、そして緑の非常に濃いブナ林の原生林 白神山地がみえる。ぐるっと 360度の展望だ。



岩木山山麓から津軽半島にいたる広い津軽平野には緑の森に混じって点々と池が見える。  
 この岩木山北山麓は津軽 古代のたたら製鉄の故郷。今は 南側 嶽温泉からの道が岩木山への本道になっているが、昔はむしろ北側からの道が本道であり、鬼の住処 岩木山の鬼伝説が数多く残る。  
 その向こう津軽半島にかけては縄文の遺跡が散らばる木造一亀が岡一十三湖へと続く『縄文の道』の道である。  
 本当にすばらしい景観で、登って良かったと思う一瞬である。



頂上から 津軽平野 遠望

● 山麓の岩木高原で 岩木山神社とその街道



また、もときた道を嶽温泉に下り、嶽温泉から岩木山神社まで岩木山を眺めながら山麓の道を歩く。本当によく整備された美しい高原で歩いていて楽しい道である。

ちょうど この時期 山麓に広がるりんご畑には真っ赤なリンゴが実り、またとうもろこし畑も収穫の時期。街道のあち

こちにこの地の名産『嶽キミ』を売る店が旗をなびかせている。



りんご畑岩木高原



嶽キミの直売

道端の店の親父が蒸したのを食べろとくれる。実に甘いとうもろこしで、good。早速 宅急便で家に送った。

後日談ですが、これはヒット。いつも送っても色々言う家族が今度は非常に喜んだ。お勧めです。

嶽キミをほうばりながら、美しい松林のつづく街道を移り変わる山の景色を楽しみながら約 1.5 時間山麓の高原を歩き、岩木山をご神体とする岩木山神社に至った。

岩木山はほんとうにのんびり山歩きが楽しめる山である。

今回は嶽温泉にはいれなかったが、次回は嶽温泉に泊まって白神山地と結んで歩きたい。



岩木山神社

岩木山神社に参拝して 門前の茶店のオバちゃんといとときり昔の話をして弘前へ戻った。

明日台風が来るが、十三湖へはどうしても行きたい。

五所川原から津軽軽便鉄道で太宰治の故郷「金木」まで行こう。

### ● 津軽軽便鉄道で金木へ



五能線から りんご畑越しに岩木山



津軽軽便鉄道より 津軽半島の山々

弘前から五所川原への五能線沿線には岩木山を背景にリンゴ林が延々とつづいている。

夕焼けを背景にレンズ状の厚い雲を頂上に巻いて、また岩木山がまた姿をかえていた。

津軽軽便鉄道に乗るのは約 30 年ぶり。かつての袴腰岳などの津軽半島の山々が夕暮れの中でシルエット

として浮かび上がっていた。

真っ暗になって 金木の駅に降り立ち、街の小さな温泉宿に泊まる。今日は私ひとりらしい。台風がやってくる。

夜半 台風の嵐が吹き荒れている。金木の小さな温泉旅館がぎしぎし揺れてる。

夜中中に台風は通過するだろう。

台風の音を聞きながら 一人せんべい布団の中 岩木山登山を振り返る。本当に来てよかった。明日は十三湖から亀が森へ行って三内丸山遺跡へ

1999. 9. 24. 青森 金木の温泉で by M. Nakanishi



## 1. 2. 「縄文の道」で

-木造・車力村・十三湊-

kzkriprint.htm 1999. 9. 25.



### ● 十三湖・十三湊



台風の風で荒れる十三湖から小泊方面を望む 1999. 9. 25.

古代縄文時代脚光を浴び、その後 忽然と消えた「北のまほろば」の確かな躍動が、今 三内丸山遺跡を中心とした活動の中から見えて来るようです。

十三湊 木造亀が岡遺跡そして 岩木山で出会った人懐っこい人達にもそれを感じました。

学生時代にキャンプを張った十三湖・十三湊。

十三湖は岩木山から流れ出る岩木川の出口。日本海にでるこの十三湖の河口では台風の後の嵐で荒れ狂っていましたが、かつての暗さは全く有りません。

かつて街道の両側は季節風よけの板囲いでとざされ、無人の砂利道が一本ひっそり続いて、十三湖に至



り、あぶなっかしい板橋がその河口をわたっていました。

十三湖にかかっていたその板橋はコンクリートのきれいな橋に代わり、舗装された街道の両側には板囲いのない家並みが続き、昔の面影は全く有りません。

明るいどこにでもある家並みがつづき、何とはなしにほっとした気持ちになりました。

縄文の道 亀が岡の遮光器式土偶の姿も陽気に感じられ、あちこちで声をかけ、楽しいwalkでした。



十三湖大橋 たもとに『十三の砂山』の歌碑



十三湊遺跡



『千貫』の地名

十三湊の交易の主要製品のひとつに鉄があるというだけで、何の根拠もなく津軽縄文の道には「たたら」遺跡があるはずと思っていました。

案内してくれた車力村のタクシーの運転手さんは、町の様子を次から次へと語ってくれ、「たたら」の話になり、「津軽にも 砂鉄が見つかるはずなんだが・・・」と聞いたところ「縄文の道・沼地群と海岸砂丘が広がるこの七里長浜の海岸線で 子供の頃、勉強で海岸へ行き、磁石をころがして 砂鉄をとった。最近では知らないが・・・」と聞きました。

津軽半島の海岸が、打ち寄せる荒波で洗われた浜砂鉄の宝庫であることや「千貫」や「真砂」の 製鉄起源の地名が残っていることも判りました。

津軽遺跡の散らばる「縄文の道」と砂鉄「たたら」の道」の接点があることが判り、うれしくなりました。

## ● 縄文遮光器土偶の亀ヶ岡遺跡

亀が岡遺跡は街道の道の際にモニュメントと看板がち、後ろに藪があるのみでした。

「こんなものか」と思いつつ、集落をぬけ、縄文館の方に歩いて行くと、次々と丘があらわれ、池が有り、地図からするとどうもこのあたりが 縄文遺跡群の中心のようだ。





縄文館 木造町 亀が岡



亀が岡遺跡の土偶



赤漆塗り漆器

縄文館では赤の漆が鮮やかに残る漆器とその前にそっと置かれたユーモラスな表情の素朴な土偶に遮光器土偶の完成された美しさとは違った語りに惹かれました。

縄文館から 丘陵地の森を抜け、湿原や池の散らばっている七里長浜の海岸の方へ抜け、湿原のひとつ ベンセ湿原へ行った。ニッコウキスゲの美しい湿原と聞いたが、今は一面の笹原だった。高層湿原というと尾瀬に代表される山の中の湿原をイメージしてきたが、ここでは 海岸に尾瀬やヒルガノ高原でみたのと同じ湿原が広がっている。

縄文の人々は丘の上に住み、これらの湿原や池のまわりにいる魚や動植物を取る事で定住が始ったと想像。これら水辺・芦原は生活の場として重要な意味を持っていたのだろう。

広がる湿原の中から また違った津軽平野の一面を見ました。



台風の強い風の中 念願の十三湖から亀が岡遺跡に立つことが出来、また、砂鉄・話鉄の道の痕跡も聞くことが出来、縄文の道を後にして 三内丸山遺跡に向かった。



『亀が岡とは南北にながながとらなる海岸砂丘界風山のひとつの丘の名である。亀が岡は、標高約15ないし20メートルほどもある。この丘が縄文晩期、あたかも都市のように栄えたのは、まわりに大小の湖沼をめぐらし、魚介がゆたかで、大きな人口を養えたからに違いない。』  
句馬隆太郎『街道を行く 一北のまほろば』より



### 3.3. 三内丸山縄文遺跡で

mryma.htm  
1999.9.25.

1. 山内丸山遺跡 お月見コンサート
2. 縄文トーク
3. 山内丸山遺跡 見学会



司馬遼太郎が『北のまほろば』と形容した津軽。

¥昨日の大嵐 午前中は強い風と雨が残っていましたが、午後 青森 三内丸山遺跡を訪れたときにはそれがうそのように晴れ渡り、気持ちの良い午後になりました。

今から 5000 年の昔、この北の地に縄文の大集落があり、縄文の歴史を塗り替えた三内丸山縄文遺跡がある。

青森の市街地のはずれ、八甲田の連山を背に、眼前には陸奥湾が青森の市街の向こうに広がり、実に雄大な景色が見渡せる森の静かな丘の上に遺跡が広がっていた。

5000 年前の縄文の時代に、この巨大な櫓・住居群をもった大集落があったことは、ほんとうに驚きであり、それから千数百年にわたり 北の中心として 縄文の生活が営まれてきた。

人々は狩猟・漁労とともに 栽培植物とも言える豊富な栗林を持ち、さらに幾つかの植物を栽培し、酒も造ったと言う。

多数の土器や鍬など石器と共に無数の素朴な土偶が出土し、その素朴な表情は 今なにを語り掛けているのか? その表情に惹かれ、親しみを覚えました。

出土した黒曜石やヒスイ・コハクそしてアスファルトトなど日本各地の材料で造られた出土品の数々。その数の多さは、この縄文の時代にも日本海沿岸から北海道を中心に、日本・世界を結ぶ交流の道があり、その真っ只中の中心として、三内丸山の集落があったことがうかがえる。

日本人のルーツといわれる弥生人もまた、稲作 鉄伝来の道もまさにこの道を通して日本に伝わってきたのだろう。

また、接合のルーツ 縄文の漆・アスファルトもしっかり見て来ました。

その後 縄文後・晩期には 津軽半島を中心に遮光器土偶出土で知られる亀岡文化が花開く。

そしてこの北東北地方は忽然と日本の歴史の檜舞台から消えてしまう。 中世安東氏の交易の拠点として 津軽半島先端部の十三湊が脚光をあびるまで . . . . .

青森 北の大地に縄文文化 それもきっちりとした定住の営みを持った文化があり、日本各地大陸との頻繁な交流の道が有った。それから延々と現代に続く日本人の流れ。  
実際に三内丸山遺跡に立って 古代へのロマンを膨らましています。



三内丸山遺跡 収蔵庫



貝塚地層断面



漆の塗られた鍔



語りかけてくる土偶

復元された縄文の住居の立ち並ぶ丘で開催された三内丸山縄文発信の会の「縄文トーク」や「お月見コンサート」も本当に印象深い集いでした。

- 縄文人の酒の話そして江口先生のアフリカの民話と津軽の民話と同じものがあるのにビックリしました。
- 初めてまじかで見ると津軽 イタコ滝越ソダさん の口寄せ・神おろし。人懐っこい話振りに親しみを覚え、宗教的なものめずらしさなど吹っ飛んでいた。
- 夜、この三内丸山遺跡の丘で開かれた「お月見コンサート」と「月見の宴」は本当に幻想的な夕べでした。

森の向こうから上がった満月の光りを背に、津軽の土地に根付き、新たなリズムで演奏される津軽三味線・笛・縄文太鼓などに思わず一緒に身をゆすっていました。

- また 静かに語られる津軽の民話や民族楽器『ジンベ太鼓』に合わせて、語る江口さんのアフリカの民話に古代縄文人の活動に思いを馳せました。

## 1. 三内丸山遺跡 「お月見コンサート」



三内丸山遺跡 「お月見コンサート」で 山上進氏ほか



フルベの昔話を語る江口さん  
【復元大型住居前の丘で開かれたお月見コンサートで】

## 2. 【縄文トーク】 復元大型住居で



縄文トーク： 縄文の女性 & 縄文の酒 を語る



### 3. 山内丸山遺跡 見学会

幻想的な森のお月見を新しい友達と酒を酌み交わし『古代に思いを馳せながら』の忘れられない三内丸山縄文遺跡での一夜でした。三内丸山遺跡の発掘現場を案内してもらった辻誠一郎先生(歴史民族博物館)のミステリー顔負けの発掘逸話や縄文人が酒を造るために栽培した「エゾニワトコ」の話にも感激しました。



案内してもらった辻先生



三内丸山遺跡のニワトコ

自然界の食物連鎖の中 『栽培の持つ意味』については、全く、知りませんでした。「自然の植物には、鳥や動物などの天敵がいて、それらを食べ尽くし、種をばら撒くので、密集しての栽培は難しい。天敵のいない植物のみが集中的に育成できる。つまり 栽培としての可能性がでてくる。長い年月の試行錯誤だ」と。

三内丸山遺跡 鉄塔の下から出土した植物の数々の種から 「縄文人が酒を保有し、その酒を造るため、エゾニワトコを栽培してた」という。そして「毎日飲んだくれていたのか」と言うそうでは無くて、「何かの節目の儀式か 部族みんなの大集会で飲まれたらしい。まだ、それが何か 謎である」と。

この時代に大噴火した八甲田大岳の大噴火と関係するかも・・・

分析・解き明かして行く過程は発掘をやる人もエンジニアも全く同じ。

「不思議やなあ・・・」の思いが出発点であることも。

現場で熱っぽく解説してもらった辻先生のミステリーじみた謎解きに胸わくわくでした。



発掘された八甲田大岳爆発の地層を説明される辻先生

「北のまほろば 津軽」 country walk

[ 完 ]

